

新しい出会いを求めて

寺 延 美恵子

川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部講師
診療情報管理士指導者

診療録管理士から診療情報管理士への名称変更が行われ、新たな道を歩みはじめて10年になります。この10年の間に、業務内容には新たな出会いが数多くありました。私たち診療情報管理士の役割が、主として診療録のいわゆる物の管理を基本とする業務内容から、診療録管理体制加算による9項目業務の充実、インフォームドコンセントや診療録の開示請求での診療記録内容の精度管理、DPC（Diagnosis Procedure Combination：診断群分類）におけるデータの収集、ICD（国際疾病分類）に基づく傷病名の分類に処置や手術などのデータ精度管理、個人情報保護法の成立に伴い守秘義務の徹底・情報システム運用を配慮した診療録作成を行うことや電子カルテシステム導入における診療録部門での参画などに拡大しました。さらに、病院経営に必要な情報提供やマネジメントができることを要求されています。日本医療機能評価機構での評価項目にも診療情報管理士に関する内容は含まれています。

平成8年4月から7月号での巻頭言に寄せられている診療情報管理士への期待に、個々の病院で勤務をしている一人ひとりが、千歳一隅のチャンスとして心に留め、研鑽を積み、縁の下の力持ち的存在業務にも真面目に取り組んできました。そのうえに、周囲の意識や環境が大きく変化したことも事実です。名称変更でのさまざまな思いのなかで全国的には、大きな3グループでの活動がはじまり、各々の組織での飛躍がありました。この3グループが2年以内を目途に、新たに統合し再編成がなされるという嬉しいニュースがあります。10年の歳月を経て新たな組織への出会いも『素晴らしき道草』といえましょう。

私が常に思ってきたことは、「何事にも基礎的、基本的なことの十分な理解は大きな力になる」ということです。また、「今、自分がすべきことを与えられた環境のなかで、努力を惜しまずに実践をする」ということです。私が認定をいただきました当時の学習の場は、年に1回の日本診療録管理学会、診療録管理士協会の研修会、九州の研究会および福岡県の研究会など数少ない状態でした。しかし、この数年での学習の環境は、学会はもとより生涯教育、また各研究会も活発で、学習の場も多く、とても恵まれています。今後とも自己研鑽を積み、期待される存在にならなければならないと自認しています。また同時に診療情報管理士には、質の向上とともに業務内容の拡大での癌登録、外傷コーディング、ICF（International Classification of Functioning, Disability and Health：国際生活機能分類）のコーディングにも期待をされています。

診療情報管理士の資格認定はゴールではなく、診療情報管理士としての期待に応えられる業務のスタートラインです。人生での仕事に「さようなら」ではなく「また、会いましょう」といえるような出会いを見つけましょう。

私は、さまざまな出会いを大切に、初心を忘れずに、実るほど頭をたれる稲穂のように、日々成長したいと思っています。茶の湯のころ「利休七則」で得た精神を大切に、夢や希望は持ち続けたいと願っています。皆さん、一緒に診療情報管理士としての仕事に出会い、作り上げる喜びを実感しましょう。